

天平二年庚午の冬十一月、大宰帥大伴卿
大納言に任せられ、京に上る時に、儼従等
別に海路を取りて京に入る。ここに羈旅を悲
傷び、各所心を陳べて作る歌十首

三八九〇番

我が背子を 我が松原よ 見渡せば 海人娘子ど
も 玉藻刈る見ゆ

三八九一番

荒津の海 潮干潮満ち 時はあれど いづれの時
か 我が恋ひざらむ

三八九二番

磯ごとに 海人の釣舟 泊てにけり 我が舟泊て
む 磯の知らなく